

# ．大学におけるボランティアセンター 設置の必要性に関する一考察

立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて

---

## はじめに

近年、大学等において、ボランティア活動をカリキュラムに取り入れたり、相談や情報提供などの機関を設けるなど、学生のボランティア活動を支援する様々な取り組みや工夫が行われている。立命館大学においても、ボランティアコーディネーター養成プログラムが開講されたり、学生の多様な学びの創造を目的とした「スチューデントイニシアチブ科目」や「ヒューマンサービス実習」、「インターンシップ」など、いくつかの教育プログラムが存在している。また、新たな入試方式として高校時代のボランティア体験により、入学の可否判定を行うという「ボランティアスタディ入試」も実施され、今後、ますますボランティアへの関心と学びの欲求が高まることが予想される。

また、筆者らが 2002 年度に行った衣笠キャンパスの学生を対象とした「ボランティアに関する意識と活動実態調査」(注1)においても、立命生のボランティアへの関心と学びの欲求の高さを把握することができた。しかし、これまで立命館大学では学生のボランティア活動の実態把握が十分なされていないとは言えず、学生の想いや活動を評価したり、支援する環境整備が行き届いているとは言えないのが現状である。そこで、それらの課題の解決策として、「情報提供」「相談の場」であることはもちろん、ボランティア教育プログラムの研究・開発とその実践機能を備えたボランティアセンターの設置が必要であると考え、教員やボランティアコーディネーター養成プログラムを修了した学生と共にプロジェクトを立ち上げ、大学ボランティアセンター設立に向けた活動と研究を行ってきた。

本稿では、まず、そこでの研究活動を踏まえ、立命館大学生のボランティアに関する意識や活動実態を明らかにし、ボランティア活動が学生に与

える影響について考察する。

そして、次に、既存の大学ボランティアセンターである明治学院大学ボランティアセンターでの特徴的な取り組みを事例として取り上げ、各プログラムがもたらす効果などを分析する。同センターの取り組みは、2003年度から始まった文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム(COL)」を受賞し、全国的にも注目されている。ここでのインターンシップを通して、大学ボランティアセンターにおけるコーディネーターの業務や役割、学生スタッフの役割や活動内容や意識、大学の教育プログラムとの関連、大学におけるボランティアセンター運営などについて学んだ。

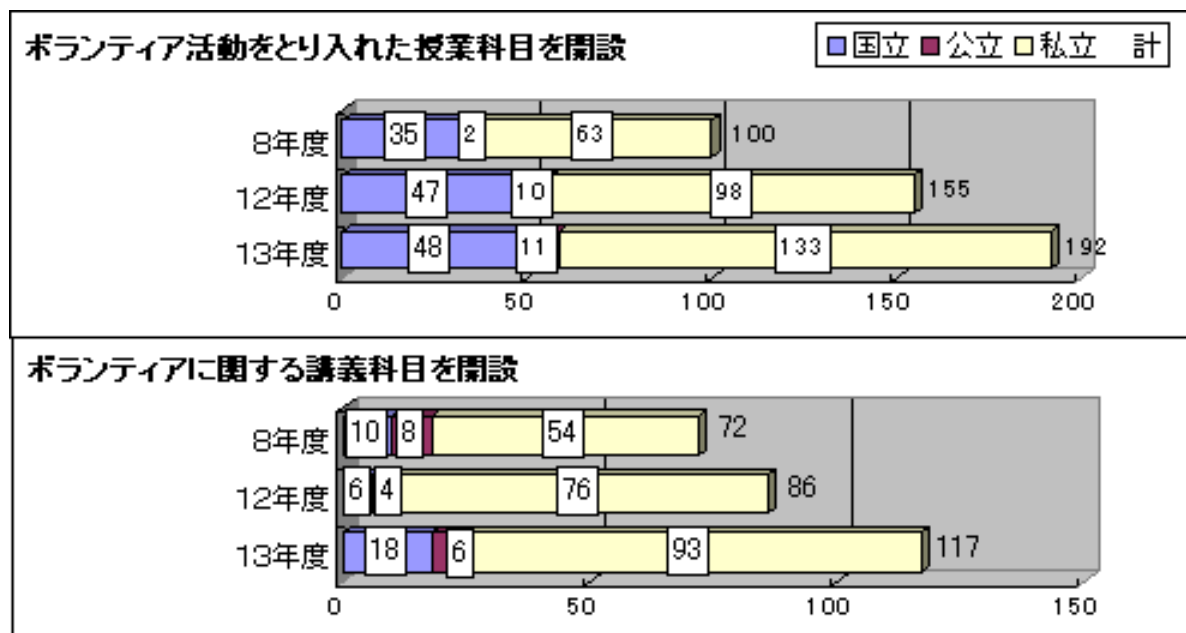
そこで、プロジェクトでの研究活動や、明治学院大学ボランティアセンターでのインターンシップで学んだことを基に、本稿では、大学ボランティアセンターの可能性について考察したい。

## 第1章 大学でのボランティアセンターを巡っての情勢

1995年の阪神・淡路大震災の際には、多くの学生ボランティアが活躍し、「ボランティア元年」と呼ばれた。その後、2001年の「ボランティア国際年」を経て、ボランティア活動の重要性が広く認識されるようになってきた。そして近年、それらのボランティアブームと大学の教育改革などにより、大学におけるボランティア教育プログラムの必要性が強調されている。

文部科学省高等教育局大学課大学改革推進室が2002年11月に出したりポート「大学における教育内容等の改革状況について」(図1-1参照)によれば、ボランティア活動を取り入れた授業科目を開設している大学やボランティアに関する講義科目を開設している大学は、2001年度(平成13年度)で、全国663大学(国立95校、公立73校、私立494校、放送大学)中、それぞれ192校と117校にのぼり、ここ数年で大きく増えていることがわかる(注2)。また、大学の中には、学生向けのボランティア養成講座を開催したり、学内に学生のボランティア活動のための情報提供や相談などを行うセンターを設け、積極的に学生のボランティア活動を支援する大

学も出てきている。現在、日本の大学・学生ボランティアセンターは、筆者が把握している分で50ヶ所ある（注3）。



大学院大学8大学(国立4大学、公立1大学、私立3大学)は対象としない。  
出所:文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」2002

図1-1 ボランティア活動を取り入れた授業科目等の開設状況

また、2002年7月に発表された中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動等の推進方策について」の中でも詳細にわたって大学におけるボランティア教育政策が議論されている。そこでは、大学等による学生に対する奨励・支援として、「大学、短期大学、高等専門学校、専門学校などにおいては、学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励するため、正規の教育活動として、ボランティア講座やサービスラーニング科目、NPOに関する専門科目等の開設やインターンシップを含め学生の自主的なボランティア活動等の単位認定等を積極的に進めることが適当である」と記されている。

また、「学生の自主的な活動を奨励・支援するため、大学ボランティアセンターの開設（専任職員、学生ボランティアの配置）など学内のサポート体制の充実、 Semester制度や、ボランティア休学制度（休学期間中の

授業料の不徴収、在籍年数制限からの除外等)など活動を行いやすい環境の整備、学内におけるボランティア活動等の機会の提供などに取り組むこと」が強調して述べられている。

さらに、大学等に対する国等の奨励・支援として、今後、「大学等の評価において、ボランティア等に係る教育の取組や学生の自主的ボランティア活動等への支援等を評価指標の一つとして適切に位置付けることも検討することが期待される」と記されている。

実際、文部科学省が 2003 年度から始めた「特色ある大学教育支援プログラム (COL)」においても、大学ボランティアセンターの取組みや、正規科目としてボランティアなどの社会体験を取り入れた教育が採択されるなど、ボランティア・サービスラーニング・インターンシップといった体験学習を取り入れた「学生参加型教育」などの採択が目立っている(注4)。

また、京都市においても京都市教育委員会が、今年度から 6 大学と提携して「学生ボランティア」学校サポート事業を行っている。授業補助や障害のある子の学習支援、放課後の遊びなど、希望する内容を提携大学に示して学生ボランティアを募集し、京都市立の学校・幼稚園に派遣するというものである。教員を目指す学生などが参加し、将来に向けて資質の向上を図ったり、学校・園でも子どもたちが喜び、放課後の安全確保にも役立つなど好評で、今後も期待が高まっている(注5)。

以上のような大学とボランティアに関する動向からも、今後、ますます大学におけるボランティア教育への注目が高まり、それを担う機関としての大学ボランティアセンターは増えていくものと考えられる。

## 第2章 学生とボランティア活動

### 第1節 立命館大学生のボランティア活動実態

では次に、立命館大学生のボランティアを含む課外自主活動の実態について見ていく。2003 年の「学園通信 RS 特別号・課外自主活動&学生生活

援助版」によると、2002年度の課外自主活動参加者数は、公認団体に7,317名、これに登録団体を加えると15,069名にのぼり、参加率は50.3%（学生数費）になる。1999年度の参加状況は全体で9,703名、参加率43%であったことから、課外自主活動への参加は増加しているという状況が明らかになった。これは、あくまでも大学で把握している数に過ぎず、その他の学内外での活動を合わせると、さらに多くの学生が課外自主活動に参加していると考えられる。

また、前掲の2002年に衣笠キャンパスの学生を対象として筆者らが行ったボランティアに関する意識調査（有効回答数392サンプル）においても、立命館大学生のボランティア活動に対する活発な実態が伺える。図2-1は、ボランティア活動経験について聞いたものであるが、立命館は「現在している」14.0%と「過去にしていた」33.7%を合わせると、ほぼ半数がボランティア活動を経験している。また、「現在している」人に注目すると、内外学生センターが行った全国調査では7.2%であり、立命館の割合が全国平均と比べて2倍近く高いことが分かった。過去の経験ではあまり差がないにもかかわらず、現在ボランティア活動をしている人が多い要因として、立命館大学では課外活動がしやすい環境にある、それが校風となり活動的な学生が集まりやすいということが考えられる。そして、周りに活動している人が増えると誘われたり、「自分も何かを始めたい」という思いになり、新たに参加する人が増えるという循環作用が生まれていると考えられる。活動分野については、社会福祉分野が38%で最も多く、国際分野20%、イベント9%、環境分野と募金活動が同率6%という順になっている。

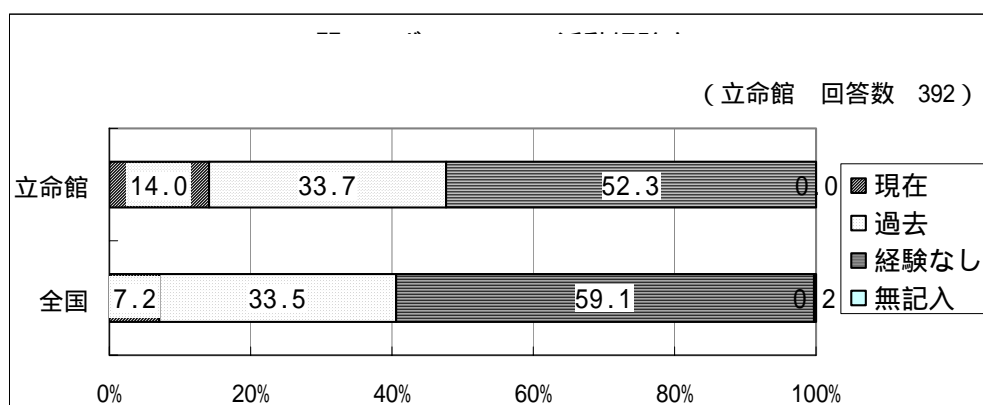


図2-1 ボランティア活動経験率

さらに、個人だけでなく、サークルやクラブ活動として、本来の活動内容を生かして、ボランティアな活動をしているところも少なくない。例えば、ダブルダッチのサークルは、児童館や小学校からの依頼を受け、子どもたちにダブルダッチの指導を行っている。この活動は、地域への貢献という意味合いだけでなく、これを通して、ダブルダッチというあまり知られていないスポーツの普及という自分たちのミッションも同時に達成している。まさに、ボランティア活動のもつ双方向性が生かされた活動である。他にも、落語研究会やマンドリンクラブが老人ホーム等で公演したり、体育会ボート部がイベントを主催し、子どもたちにボートの試乗体験などを行い、地域住民との交流の場になっている。

このように、立命館大学ではボランティア活動を含めた課外自主活動に多くの学生が参加しており、その分野も多種多様なものとなっている。また、地域との交流も活発に行われ、地域からの学生への期待が確実に高まっていると言える。

## 第2節 ボランティアに関する意識とニーズ

次に、立命館大学生のボランティアに関する意識とニーズについて見ていく。大学に入学して何かを始めたいけれど、何からどのように始めればいいのか分からないという人が大勢いるのではないだろうか。このような推測のもと、筆者らは、ボランティア活動へのきっかけ作り、出会いの場の提供を目的に2度のボランティアガイダンスを開催した。1度目は、2003年4月30日(水)と5月1日(木)の2日間で、学生団体を中心とするブース出展、チラシ出展、交流スペースを設置し、約100名の来場者があった。2度目は、2003年6月30日(月)~7月3日(木)の4日間で、1度目のブース出展に加え、ボランティア体験や講座なども行い、約200名の来場者があった。この参加人数の多さからもボランティアに対する関心の高さが伺える。参加者の感想からは、来場した理由・目的として、「ボランティアがしたかった」「特定の分野のボランティアに興味があるので探しに来た」など目的が明確な人だけでなく、「何かをやってみたい」「夏休みに何をしようか考える参考にしようと思った」など、ボランティアに対する

強い意志はなくても興味があるという人は多いということが分かった。そして、ガイダンスに参加した結果、「始めるきっかけになった」という意見や、「いろんな団体が一同に集まっているので、たくさんの情報が得られ、直接、話が聞けて良かった」「以前からボランティアをしたかったが、実際どんなものがあるのか、どこに行けば情報があるのか分からなかった」という意見があった。ガイダンスを通して、ボランティアに対する関心の高さが明らかになった一方で、これまでその関心が実際の活動に結びついていなかったという実状も明らかになった。その理由として、情報がない、どんなものかわからない心理的な不安がある、きっかけがない、などが考えられる。これらを解決する方法として、情報を得られる場、相談できる場、ガイダンスや講座などのきっかけとなり得る様々なプログラム等が必要である。そして、それは学生にとって身近な場所にあることが求められている。

また、出展してくれた学内・学外のボランティア団体からは、「ボランティアが見つかった」「団体同士で知り合いになれた。同じような活動をしている団体があるのに、これまで知らなかった」「情報交換ができて良かった」という声が寄せられた。これらから、団体同士も普段あまり交流の機会がないという現状が明らかになった。ボランティアガイダンスは、学内・学外の団体にとっても、ボランティアを見つけるという本来のねらい以外に、情報交換や交流の場になったようだ。このような様々な出会いと交流を演出することは、様々な立場のニーズに対応し得る意義深い取り組みである。

### 第3節 ボランティア活動が学生に与える影響

前節までのところで、立命館大学生のボランティア活動に対する関心の高さや活発な実態について述べてきた。ここでは、それを踏まえて、ボランティア活動が学生に与える影響について考えていきたい。

前掲の筆者らが行った調査では、現在も活動を続けている人に対し、その理由を聞いてみた。その回答は次のようなものである。活動がおもしろいという「活動自体の楽しさ」、自分とは異なった考え方や文化をもつ人な

ど「刺激し合える人との出会い」、知らない世界に触れることで新たな発見ができるという「非日常的な場面での学び」、相手に喜んでもらえるという「他者評価による自信」などである。活動を通して、主に「学びと自己成長」を確かなものとして実感している様子が感じられる。また、「ボランティア活動を通して、それに関連する社会問題、社会事情を意識的に気にするようになり、内容の理解が早くなったような気がする」という声も聞かれた。これは、実際に体験することで得られた深いレベルでの学びが、正課授業においても、より主体的に学ぶ姿勢を引き出していると考えられる。

最近の学生は、「社会力」が低下していると言われている。「社会力」とは、門脇によると「自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくのに必要な資質や能力」と定義されている（注6）。興相は、こうした力を獲得するためには、「体験を通して学び、多様な社会問題にふれ、その問題解決を試み、社会に貢献できる自分を自覚できる機会が必要である」と述べている（注7）。上記のボランティア活動を体験した学生が述べているように、ボランティア活動には、互いに違う考え方や価値観を知り、認めあい、同じ目標に向かって協力しあう中で、「学びと自己成長」を得ることができる「教育力」が備わっていると考えられる。加えて、興相は、ボランティア活動は青少年に次の4つの“成長”の機会を提供すると分析している（注8）。1つ目は、人生の意味や目的、人間社会の異なる価値観について知り理解するのを助けることを通じての「精神的成長の機会」の提供である。2つ目は、社会における善悪や正義、公正、権利と義務などの問題についての批判的眼をもって正しく認識できるよう助けることを通じての「道徳的成長の機会」の提供である。3つ目は、分別をもった有能な社会の一員になるために必要な理解やスキルを習得するのを助けることを通じての「社会的成長の機会」の提供である。そして、4つ目は、自分たちの属するさまざまなグループの性質や役割を理解するのを助け、多様性と相違を尊重する気持ちを奨励することを通じての「文化的成長の機会」の提供である。こうしたボランティア活動のもつ「教育力」への関心は、世界的に高まってきている。この「教育力」を活用できるような環境を大学において整備していくことは、今後の重要な課題であると言えるだろう。



## 第3章 明治学院大学ボランティアセンターにおける 取り組み

2002年度、全国のいくつかの大学ボランティアセンター調査を行った結果、専任職員であるボランティアコーディネーターを配置して大学と学生との連携がうまくいっている点、地域や企業との交流・連携が活発な点など、筆者が目指したい大学ボランティアセンター像として、おおいに参考になると考えたため、本章では、既存の大学ボランティアセンターである明治学院大学ボランティアセンターでの特徴的な取り組みを事例として取り上げ、各プログラムがもたらす効果などを分析する。

### 第1節 ボランティア活動を取り入れた授業科目

明治学院大学では、全学的に正規科目として、ボランティアに関する講義科目やボランティア活動そのものを取り入れた授業科目が開講されている。例えば、ボランティアに関する講義科目では、全学共通科目の「ボランティアと市民社会」、社会学部社会学科のボランティア体験(実習)と研究を総合させた科目「フィールドワーク論」、社会学部社会福祉学科の「実習科目」、法学部政治学科のボランティア活動も取り入れた「フィールドワーク」、国際学部国際学科の「実習科目」がある。

また、ボランティア活動の体験を単位として認定する科目として、「社会参加実習」がある。これは、経済学部2年生担当の正規科目で、春学期(前期)・秋学期(後期)のそれぞれ開講されている。各2単位で、担当教員はボランティアセンターのコーディネーターが非常勤講師として担当している。授業の全日程に参加することが受講の前提で、授業以外の時間を使つての40時間以上のボランティア体験が必須となる。

授業の目的は、「ボランティア活動への参加を通して、立場や考えの異なる人とのコミュニケーション能力、自己管理能力、率先性やリーダーシップ、柔軟性、自己肯定意識、社会的な課題を理解・分析する能力、調査する能力、論理的に他者に事実や自分の考えを伝える能力、自分の考えを基に解決策を考案する能力などの涵養」である。(シラバス抜粋)

授業の流れとしては、オリエンテーション 保険加入・活動先リスト配布・ワークショップ「ボランティアとは？」 活動先選択について個人面談 活動先確定・動機シート記述・紹介状配布と活動の開始 「中間報告」 「中間報告」 最終報告レポート提出・ふり返し・活動先へのコメント記入、という流れになっている。

オリエンテーションでは、40名ぐらいの学生が受講していたが、40時間という長時間の体験が必須なことや、中間報告・最終レポートなど、決して甘くはない授業であるため、次週には20名に減っていた。残った学生たちに受講動機などを書いてもらったが、「ボランティア活動をしたい」「ボランティアについて考えたい」「絶対にこの授業を受講したい」など、意欲的で高い意識で臨んでいた。

活動先としては、様々な分野の19箇所が用意されていたが、20人もの学生の受け入れ先を見つけるのは容易ではないと思う。これは、大学にボランティアセンターがあるからこそ、日頃からコーディネーターとのネットワークができているからこそ、実現できている講義であると思う。

以前、本講義を受講した人の感想は、「今までボランティアに興味があったが、参加するきっかけがなかった。授業をきっかけに参加できてよかった。」というものが多かった。その他、活動先の対象者との接触を通して、「相手の立場に立って考えることの大切さを知った」「自分を見直すきっかけになった」「ボランティアを体験した自分としては、みんなにも同じ体験をしてもらって視野を広げてほしいと思う」といった声もあった。

ボランティア体験を単位化することには様々な議論がなされているが、ここでの学生を見る限り、また、以前の最終レポートや感想を読む限り、その効果は否定できない。講義として取り組むこともあり、いっそう責任を持って活動しているし、ボランティア活動をやったことがない人も始めてみるきっかけになっている。さらに、以前はボランティア活動に対してネガティブなイメージを持っていた学生が、体験を通して、ポジティブな意識に変わったという例もあった。強制的ではなく選択性で行うこと、事前学習によって意識付けを行うこと、活動先との関係づくりや本質を見るためにある程度長時間の活動を行うこと、そして、中間報告、最終レポートとふり返し、というように一連の流れで学べるプログラムが重要である。

それができれば、ボランティア活動を授業に取り入れることは、きっかけづくりや主体的な学びを形成する手段として有効であると考えられる。

## 第2節 地域との共生

ここでは、大学と地域との連携が成功している事例として、4つの事例を取り上げる。

### 1) 「地域学生わくわく交流祭」

現在、明治学院大学横浜キャンパスは広域避難場所に指定されており、災害時には学生はもちろん、多くの地域の方々が集まることが予想される。そこで、現実として「両者がどのように連携をとり、広域避難所として機能させるのか」という一つの課題に対し、その第一歩として『地域 学生間の顔の見える関係づくり』を目標として掲げ、ボランティアセンターと体育会執行部、地域住民との間で話し合いを重ね、2002年度から「地域学生わくわく交流祭」が始まった。ボランティアセンターの学生スタッフは、炊き出しなどを担当し、協力していただける地域の農家を探すところから学生スタッフが行い、地域とのネットワーク作りを学生が担っている。単なる地域と学生の交流にとどまらず、災害救助の模擬訓練も同時に行い、地域住民に好意的に受け入れられている。これは、まさに地域と大学が連携し、地域が抱える課題を協働して解決していこうとするサクセスモデルである。

### 2) 「ノートテイク・ボランティア養成講座」の開催

聴覚障害学生が講義を受ける際の情報保障とそのサポートを狙いとする要約筆記の知識や技術を習得するための講座企画である。学生には、障害、コミュニケーション、情報保障について理解を深める機会となり、また、学習権の保障やノーマライゼーションの実現について、大学がいかなる取り組みをなすべきか、体験を通して考察できる。講座は一般にも公開し、学生と地域参加者との交流と情報交換の場にもなっている。講座修了生の中から、学生も地域参加者からも聴覚障害学生のノートテイク・ボラ

ンティアをする人がいるということである。

### 3) 地域の方が直接ボランティアを募集する場づくり

地域の施設に通う障害をもった方（当事者）が、自立のための宿泊合宿の介助ボランティアを募集するため、「知的障害者福祉論」という講義の冒頭でボランティア募集をしていた。その施設は自立支援を行っている施設であるため、大学に出向いて自分で募集すること自体が自立支援の一環であると考え、ボランティアセンターでの募集だけでなく、本人に講義で呼びかけてもらうことをボランティアコーディネーターが提案し、担当教員の許可をもらい、本人が受講生全員の前でマイクで呼びかけていた。話された当事者の方の「緊張して、うまく伝わったかどうか不安だけど、あんなに多くの人前で話すことができうれしかったです。このような機会を与えてくださって、ありがとうございました。」という言葉が印象的だった。また、始まるまではザワザワとしていた受講生も、当事者が話し始めると静かに聞いていた。

このようなケースは、誰でもいつでもというわけにはいかないと思うが、今回のように自立支援という目的でコーディネーターの判断のもとに行えば、受講生にも当事者にも施設にも大学にも良い効果があると思う。これは地域に広くネットワークをもっているボランティアセンターがあってこそできることである。

### 4) ジョブコーチボランティアなど

知的障害者のための近隣地域作業所をキャンパスに受け入れ、障害者によるパンの販売を学生が補助したり、重度知的障害地域作業所の自閉症の人たちが大学と契約を結び、チャペルの清掃や食堂のトレイ拭きといった作業を行うのに対して、学生が「ジョブコーチ」補助ボランティアなどを行っている。このようにキャンパス内においても、自然に学生たちがボランティアに参加したり、障害をもつ人たちと交流する活動も行われている。

### 第3節 学生スタッフの役割

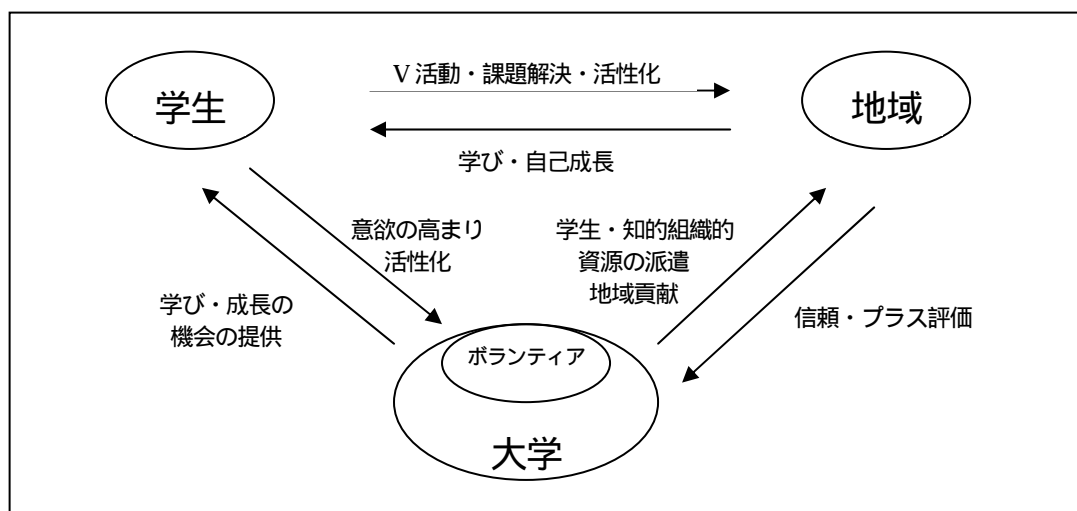
明治学院大学では、現在、白金・横浜両キャンパスにそれぞれボランティアセンターがあり、専任のコーディネーターが各1人所属し運営を担っている。そこに、学生の自主性を高めるため、学生スタッフが毎年度のボランティア活動推進委員会に構成員として加わり、教員及び地域代表委員と共に運営に携わっている。2003年度は、両キャンパス合わせて31名の学生スタッフが所属しており、毎年、学生スタッフの人数は増加している。学生スタッフはセンターの年間活動の企画・運営、ニュース・レター発行、ホームページ運営、地域学校での講師、地域ボランティアの活動支援等を担っている。学生スタッフの役職は、全体の代表、学年の代表、渉外、通信担当などがある他、企画ごとにもリーダーや広報など役割が分担されており、企画ごとに変わる。

学生スタッフに対して、学生スタッフをやっていて良かったことを聞いたところ、「企画立案や広報の方法が学べる」「一般学生より多くの情報を得られる」「外部団体とのネットワークがつかれる」「学生ではない方とお話できて勉強になる」「地域の方との交渉を通して、自分がコーディネートしているんだという意識がもてるようになった」という声が聞かれた。これらの意見から、学生スタッフにとってボランティアセンターとは、「自己成長の場」「出会いの場」であると考えられる。企画や広報、プレゼンテーションのスキルは、社会人になっても即戦力である。また、地域や企業の方とお話することは、コミュニケーション能力を養い、自分の将来に見通しをもつきっかけにもなる。さらに、学生スタッフの一人が「インターンシップをやっていてという意識で学生スタッフをやっていて」と話していた。学生スタッフの活動は、学生たちが「社会力=自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくのに必要な資質や能力」を養い、その力を持った「社会人」となる準備教育プログラムであると言えるのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、立命館大学におけるボランティア活動の実態やニーズ等を明らかにし、ボランティアが学生に与える影響について考察した。そして、その学生の自主活動や学びを支援するためには、また、地域との連携を成功させるためには、ボランティアセンターの設立が効果的であることを提案した。

ボランティアには、成長の機会を提供する「教育力」が備わっている。学生は、活動を通して、確かな「学びと自己成長」を得ている。また、ボランティア活動によって得られた学びが、正課授業においても、より主体的に学ぶ姿勢を引き出している。ボランティア活動のフィールドである地域では、学生や大学への期待が高まり、地域と大学の協働により課題を解決している例もあった。



大学ボランティアセンターを拠点として、大学と地域が連携することにより相互利益が得られ、地域を変える原動力となれるのではないかと。大学にとっては、単に評判やイメージが良くなるだけでなく、地域貢献に取り組み、信頼を得ることになる。また、大学が学生にボランティアを推進することは、学びの機会を提供するだけでなく、「自分たちの通う大学や地域社会を自分たちの手でよりよい場にしたい」という大学自治や「市民」と

しての意識を高めることにもなる。地域にとっては、大学の知的・組織的資源を活用し、課題を解決できるし、学生や教職員との接触により、地域も活性化される。このように、大学ボランティアセンターは、大学・学生・地域を効果的につなぐ役割を果たすことができると考える。地域の力を借りて学び、地域に貢献する、その中で人々のパワーやスキルが循環し、地域社会が活性化していく、その拠点となるようなボランティアセンターの設置を目指したい。

では、具体的にどのような機能や条件をもったセンターが求められているのか。まずは、地域や学内からのボランティアを求める人と学生のボランティア希望者をうまくつなぐコーディネート機能である。次に、ボランティア活動に関心がある学生に対しては、気軽に情報を得ることができ、相談できるスタッフが常駐していることが必要である。何となく関心はあるが相談するまでには到らず、始めるきっかけがない学生に対して、あるいは全く関心のない学生に対しても広く門戸を開けるためにも、ボランティアガイダンスや講座などのきっかけとなり得る様々なプログラムが必要である。さらに、全学部の学生に対して、正課としてボランティア活動を取り入れた授業科目を展開することも効果的であり、その教育プログラムの研究・開発も求められる機能である。そして、運営体制としては、学生や教職員に対するセンターの認知度を高めるためにも、センターが対象とする分野が特定のものに偏らないためにも、また、ボランティアに対する理解を促進し、より活動しやすい環境づくりや発展的なプログラムづくりのためにも、様々な学部の多くの教職員や学生スタッフが運営に関わる必要がある。加えて、学生・大学・地域のそれぞれのミッションを理解し、コーディネートする「専属職員＝ボランティアコーディネーター」の存在が、全学的な取り組みと地域との連携を成功させる鍵になると考える。

今後、大学と学生の協働により、学生のニーズや大学の特徴、地域性などに合ったボランティアセンターを設置し、ボランティア教育と環境整備が推進されることを期待したい。

## 【注釈】

- 1 企画研究 ・ボランティア研究グループ (VCTP 修了生)「立命館大学生のボランティア活動の意識・実態調査報告とボランティア活動の具体的支援」津止正敏・秋葉武・足立陽子編『大学ボランティアセンタースタディ』立命館大学人間科学研究所、2003年、Pp6 81。
- 2 全国の大学数は、大学院大学8大学(国立4大学、公立1大学、私立3大学)を除いた数。
- 3 本稿末に添付資料として掲載。
- 4 『読売新聞』2003年9月19日付記事。
- 5 『朝日新聞』2003年9月17日付記事。
- 6 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、1999年。
- 7 内外学生センター『平成14年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い 報告書』2003年、p.29。
- 8 興相寛「日本のボランティア活動の現状と青少年」『大学とボランティア』内外学生センター、2001年、Pp46 47。

## 【参考文献】

- 1 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、1999年。
- 2 興相寛「静かな教育改革 青少年のボランティア活動の推進」国立オリンピック記念青少年総合センター編『自分を変える・社会が変わる・青少年のボランティア活動の推進』2001年。
- 3 津止正敏・秋葉武・足立陽子編『大学ボランティアセンタースタディ』立命館大学人間科学研究所、2003年。
- 4 内外学生センター『平成14年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い 報告書』2003年。
- 5 内外学生センター編『大学とボランティア』2001年。
- 6 「立命館大学学園通信RS 特別号 課外自主活動&学生生活援助版」立命館大学広報課、2003年。



## 【付録資料】全国の大学ボランティアセンター一覧

1. 北海道大学学生ボランティア活動相談室
2. 敬和学園大学ボランティアセンター
3. 金城学院大学ボランティア活動推進室
4. 関西福祉大学学生ボランティアセンター
5. 松山東雲女子大学ボランティアセンター
6. 長崎純心大学純心ボランティアビューロー
7. 共立女子短期大学ボランティアセンター
8. 和泉短期大学実習・ボランティアセンター
9. 長崎純心大学短期大学部ボランティアビューロー
10. 立教大学ボランティアセンター(池袋・新座)
11. 淑徳大学短期大学ボランティア情報室
12. 大正大学学生ボランティアセンター
13. 明治学院大学ボランティアセンター(横浜・白金)
14. 東北福祉大学ボランティアセンター
15. 長野大学ボランティアセンターふらっと
16. 桜の聖母短期大学ボランティアセンター
17. 聖学院大学ボランティア部会
18. 亜細亜大学ボランティアセンター
19. 神戸大学総合ボランティアセンター
20. 関西学院ヒューマンサービスセンター
21. 麗澤大学ボランティアネットワーク
22. 中央大学 IFN
23. 立正大学社会福祉学部ボランティアセンター
24. 常磐大学ボランティア情報センター
25. 淑徳大学ボランティアセンター
26. 龍谷ボランティア・NPO活動センター
27. 信州大学 Volnet
28. 日本社会事業大学ボランティアセンター
29. 城西大学ボランティアサークルJ - N E T

30. 早稲田学生ボランティアセンター
31. 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
32. 共立女子大学ボランティアセンター
33. 東海女子短期大学ボランティアセンター
34. 中央学院大学アクティブセンター
35. 立命館アジア太平洋大学ボランティアセンター
36. 富士常葉大学
37. 静岡英和学院大学ボランティア室
38. 東洋大学ボランティアセンター
39. 鳥取大学ボランティアセンター
40. 福山平成大学ボランティア情報室
41. 佛教大学ボランティア室
42. 桃山学院大学ボランティアビューロー
43. 大阪キリスト教短期大学ボランティアコーナー
44. 日本児童教育専門学校
45. 名古屋学院大学ボランティアセンター
46. 吉備国際大学ボランティアセンター
47. 九州保健福祉大学ボランティアセンター
48. 敬愛大学ボランティアセンター
49. 聖心女子大学マグダレナ・ソフィアセンター
50. 国際基督教大学サービスラーニングセンター

---

山本有紀「大学・学生ボランティアセンターの現状と課題からみる将来像」『大学ボランティアセンタースタディ』立命館大学人間科学研究所、2003年、Pp145 146を参考にして、筆者が作成。

これら50ヶ所の大学ボランティアセンターには、「大学主導型」「学生自主活動型」「大学・学生協働型」等のあらゆるタイプのボランティアセンターが含まれている。